

## REPORT

# 第2日目 レポート (7/20)

### シンポジウム 2

「最近問題となった人と動物の共通感染症」  
7月20日 10:00～13:00 / コンベンションホール



座長 吉田 博氏



加藤康幸氏



高崎智彦氏



前田 健氏



宮川昭二氏

人と動物との関わりは、伴侶動物や産業動物だけではありません。毎年、ニュースにも取り上げられているウイルスによる感染症の問題も、さまざまな動物や昆虫を介して人に影響を与える大きな課題となっています。とりわけ、エボラ出血熱、デング熱、中東呼吸器症候群 (MERS)、SFTS は、私たちにも身近な問題として近年日本でも大きく報じられてきましたが、その実態を一般市民が深く知る機会はありません。

1976年にアフリカの中央部で見出されたエボラ出血熱は、昨年、リベリアの大統領から非常事態宣言が発令され、国家を揺るがすほどの危機的な状況であったことは、私たちの記憶に新しい出来事です。WHO チームの一員としてリベリアに派遣された加藤氏は、医療機関のみならず、医師や物資が足りない中での医療行為を紹介しつつ、これまではジャングルに隣接する小さな村だけで治まっていた感染が、アフリカの奥地まで広がった車社会によって都心部へと広がっている可能性も示唆されました。こうした背景には、近年増加の傾向を辿っているリベリアの人口に対する食料の確保や生活スタイル、交通手段の変化なども関係しているようです。

昨年、国内で流行の兆しを見せたデング熱の媒介蚊となったヒトスジシマカは、通常から日本国内に多数生息していますが、気候の変動によって年々その生息域の分布北限は北に移動しており、他にも日本で発生している新興感染症として、O157 やノロウイルス、HIV、E 型肝炎、トリインフルエンザ (H5N1)、新型ヤコブ病、そして今年になって韓国で発生した MERS などがあげられます。

また、ダニを介して感染が拡大するダニ媒介感染症も私たち

の身近に潜む感染症のひとつで、2012年には国内で致死率の高い重症熱性血小板減少症候群ウイルス (SFTSV) による感染が報告されました。特にペットなどに付着したダニから人に感染する可能性が指摘されていますが、きちんとした知識を持って未然に感染を防ぐ対策を行なうことが重要です。

さまざまな感染症が世界各国で流行する可能性が高まっている要因のひとつとして、簡単に遠距離を行き来することができる世界の航空事情などが挙げられています。これらのことは、便利さを求めて技術の革新を行ってきた人類への警鐘なのかもしれません。これまでウイルスの研究や予防策の開発は一部の専門家の仕事と思われてきましたが、今後、新たなウイルスのリスクに対して国民全体で情報を共有し、国や専門機関との連携による危機管理意識の向上が不可欠といえるでしょう。

### シンポジウム 3

「災害に強い日本型畜産の構築のために」  
7月20日 10:00～13:00 / 会場：ラウンジ



座長 大山憲二氏



犬飼史郎氏



吉泉 努氏

産業動物と私たち人間の生活は、切っても切れない密接な関係にありますが、普段、畜産について一般市民が思いを寄せることはほとんどありません。スーパーに行けばお肉や牛乳、卵が手に入ることが当たり前になっていますが、災害が起きた時の対応はどうなっているのでしょうか。災害に強い日本型畜産の構築をテーマに、4名の演者の方が発表を行なって下さいました。

大型動物である家畜の飼育には、私たちの知らない多くの苦勞が日常的に行なわれています。例えば、牛1頭の糞尿は人間100人分に相当し、出荷前の牛は700kgにもなります。災害時ともなれば、家畜たちも興奮しており、取り扱う側にも命の危険が伴います。それらを安全に被災地から移動させるためには、専用のトラックと技術者が必要になり、1台のトラックには、12頭ほどしか乗れません。トラックがあっても、災害時はガソリンが手に入らず、その移動には、私達が考えもつかない困難が伴います。家畜改良センターは、通常は、家畜改良や有料種畜、



長谷川敦氏



本田義貴氏

飼料作物種苗の生産・供給などを行っておられますが、その家畜関連知識と技術の高さを災害時に提供できるように外部支援の仕組みをお持ちです。東日本大震災の際には、12,000頭の移動に尽力されました。その他、新燃岳噴火の際には、家畜の移動だけでなく、火山灰により畜舎が崩壊するのを防ぐために灰の除去を行われたりと、災害の度に日本の畜産を守るために貢献されています。また、家畜の配合飼料のほとんどは海外からの輸入に頼っているのが現状です。そのため、沿岸部に備蓄の施設が多く、東日本大震災でも

主要な施設が大きな被害を受け、被害のない地域から迅速に供給していかねばなりませんでした。こういった危機対応のため、飼料の国産化も大きな課題となっており、この分野については、協同組合日本飼料工業会が取り組んでお

られます。更に、鳥インフルエンザなど、家畜伝染病への対応も大きな課題ですが、例えば兵庫県では、国や自治体、自衛隊、警察などの他にも、バス協会、建設業協会、造園建設業協会等も、防疫協力体制に参加しておられ、危機対応には幅広い連携が必要なのだと改めて感じました。

伴侶（家庭）動物については、家族の一員は自身で守るということで、同行避難が原則になりました。これは、飼い主責任をより強く求められているということでもありません。経済動物である産業動物は、事業主が全ての責任を負う原則で、共済制度などもあります。その災害対応は、その危機を乗り越え、畜産事業を健全に継続することが目標です。そしてそれは、私達の食の危機管理でもあります。

会場では、家畜についての知識・技術については、例えば大学農場などにもあり、今後は、そのような連携構築も考えられるのではないかという意見もあり、UCデービス校からの参加者からは、シンポジウム5での同大学の取り組みも案内されました。

日本の畜産の課題にも目を向け、産官学民の連携の可能性を、もっと考えていかねばならないと感じました。

## オーラルセッション 3

「教育／子ども達との関わり」

7月20日 10:00～13:00 / 会場：セミナー室



座長 天ヶ瀬正博氏

これからの未来を担う子どもたちに対して、「いのちの大切さ」「いのちへの共感」をどのように教育していくかは、世界的にも大きな課題となっています。このセッションでは、主に日本、中国、アメリカ、バンラデシュで行われている教育プログラムについての報告が行われました。

また、子どもたちへの教育だけではなく、国民に対する啓発に関する教育や、その国に独自に根付いた共生に対する価値観など、私たちが国際会議の場で学ぶべき課題は多くあります。それぞれの文化的背景によってその目的や手法は異なりますが、昨年の第3回大会に引き続き教育に関するセッションには多くの人が集まり、この分野に対する興味とその効果について、大きな関心が寄せられているのを実感しました。

アメリカからは、動物介在教育の専門家として数年間に渡りグリーン



Pei F. Su 氏

チムニーズと共同研究を行っているデンプー大学のテデッチー氏と、実際に動物を取り入れ、家庭環境やメンタル面でサポートが必要な子どもたちに対するプログラムを実施しておられる、グリーンチムニーズ教育プログラム部長の木下氏から共同発表が行われました。



Golam Abbas 氏

動物の存在は、精神的な「Resilience（回復力、逆境に負けない力）」を与えることは従来から知られていますが、災害などの悲劇的な体験でトラウマを抱えた子どもたちが、動物と共に生きることでその逆境を克服することにも注目が集まっています。この発表では、こうした子どもたちの心のリスクと保護、回復についての科学的な報告が行われました。

次に、中国の学校教育の現場で動物愛護の教育を行なうことによって、さまざまな諍いの種を管理するプログラムについて、ACTAsiaの



Philip Tedeschi 氏



Miyako Kinoshita 氏



Naila Al Mahmuda 氏